

自己評価報告書

平成 23 年 4 月 26 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2008 年度～2012 年度

課題番号：20320007

研究課題名(和文) 多極化する現象学の新世代組織形成と連動した「間文化現象学」の研究
研究課題名(英文) The study of intercultural phenomenology in correlation with the organization of a new generation of researchers.

研究代表者

谷 徹(TORU TANI)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：40188371

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学 哲学・倫理学

キーワード：比較哲学

1. 研究計画の概要

現在グローバル化の進展とともに、文化と文化の関係が問い直されている。しかし、われわれの問題設定は、たとえば文化人類学の研究者が異文化に出向いてそれを観察するような類のものではない。むしろ、上記の進展とともに、われわれ自身の生活・経験の内部で起きている(ある意味では古来の、しかし別の意味では、近年急加速的に現れてきている)現象である。そこには「普遍性と特殊性」、「求心性(参入)と遠心性(排斥)」、「自閉性と開放性」、「規律性と許容性」、「生起性と沈殿性」などといった複雑な事象連関が生じている。こうした現象の本質とそこに生じている諸問題を現象学的方法によって解明する。

そのため、5つの重点領域(「言語」、「遭遇(離合)」、「精神」、「共存」、「時間」)を設定する。他方で、研究者を世代的に配置する(「拠点」、「中核」、「新世代」)。この研究分担と相互討議によって研究の統合をはかる。

これと連動して、新世代の研究者の組織を間文化的に形成して、この研究運動全体の歴史的な展開をはかる。

2. 研究の進捗状況

過去3年間にわたって「言語」「遭遇(離合)」「精神」の重点領域について研究が展開されてきた。その研究は、具体的には、基礎となる「間文化現象学研究会」、「間文化現象学講演会」、そして大規模な「間文化現象学シンポジウム」、次世代組織を形成する「間文化現象学セミナー」をつうじて行われてきた。

それぞれの企画は個別的に重要な成果をあげ、その一部はすでに公表されているが、

それにとどまらず、蓄積され成果は、再度、統合的に検討し直されて、現在、統合的な公表の準備が進められている。

3. 現在までの達成度

上記の3重点領域については、従来にない新たな研究成果が得られている。これらの成果の一部については、各メンバーの個別的な論文や口頭発表によって国内外で公表されている。しかし、2009～2010年度には『現代思想』誌(青土社)の2度の特集によって、メンバーの研究が公表された。これは研究の達成のみならず、発表においても大きな意義をもち、かつまた研究を、予想以上に進展されることにもなった。

しかし他方、2011年3月に予定されていた重点領域「精神」の研究については、東日本大震災が海外招待客の渡航自粛、被災地メンバーの移動困難などを招来し、この事情によりシンポジウムを開催することが叶わなかった。これが、予期せぬ研究展開の遅れを一定程度招いたことは、残念ながら否定できない。

このような状況を全体的に見るとき、現在の進捗状況・達成度としては、おおむね順調に推移していると言える。

4. 今後の研究の推進方策

今後は、まず2011年度において、震災によって開催されなかった第三回間文化現象学シンポジウムを開催し、それと連続する形で、「共存」を重点領域とする第四回間文化現象学シンポジウムを開催する。これによって、一定の遅れを余儀なくされた研究の進展速度が回復されるだろう。

ただ、震災後の状況はいまだ不透明であり、

その推移によっては、海外招待客（研究協力者、その他の先端的研究者）の招待に困難が生じる可能性が残る。それに対応して、本年度は、本プロジェクトのメンバーを海外に派遣する形での研究進展に、相対的に比重を置くことにする。

さらに、2011年度には、これまでの成果をまとめた報告書を作成する。

5. 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 87 件)

Toru Tani, “Kultivierung und Phänomenalisierung”, *Studien zur Weltgeschichte des Denkens, Denktraditionen neu entdeckt* (LIT Verlag), 無, 2011, 51-65.

Shinji Hamazu, “Identity and Alterity Schutz and Husserl on Phenomenology of Inter-subjectivity”, *Identity and Alterity Phenomenology and Cultural Traditions* (Königshausen & Neumann), 無, 2011, 99-112.

Yasuhiko Murakami, “Affection d’appel et prénom. Pour une phénoménologie de l’acquisition de la langue et de la communication”, *Annales de phénoménologie*, 有, vol.10, 2011, 163-176.

古荘 真敬, 「翻訳 あるいは虚無を通じた「私たち」の変容」, 『文化と政治の翻訳学 異文化研究と翻訳の可能性』(明石書店), 無, 2010, 218-240.

廣瀬 浩司, 「諸文化を横断する戦闘的な真理 メルロ=ポンティ「制度化」概念と「間文化現象学」」, 『現代思想』, 無, vol.38-7, 2010, 186-197.

〔学会発表〕(計 73 件)

野間 俊一, 「拒食と過食にみるところとからだの関係」, 食の文化フォーラム・『医食同源』 食とところ・からだ, 2010/3/6, 味の素グループ高輪研修センター.

Masafumi Aoyagi, “Administration and Divergence”, 間文化現象学第2回シンポジウム, 2010/1/24, 立命館大学.

Daisuke Kamei, “The Possibility of a “Linguistic Community””, 間文化現象学第1回シンポジウム, 2009/2/21, 立命館大学.

Daisuke Kanda, “Language and Inducement”, 間文化現象学第1回シンポジウム, 2009/2/21, 立命館大学.

村井 則夫, 「図像学の哲学」, メディア

研究会, 2009/1/5, 山形大学

〔図書〕(計 14 件)

川瀬 雅也, 勁草書房, 『経験のアルケオロジー 現象学と生命の哲学』, 2010, 358.

田口 茂, 法政大学出版局, 『フッサールにおける 原自我の問題 自己の自明な近さへの問い』, 2010, 400.

榎原 哲也, 東京大学出版会, 『フッサール現象学の生成 方法の成立と展開』, 2009, 584.

村上 靖彦, 勁草書房, 『自閉症の現象学』, 2008, 247.

山口 一郎, 知泉書館, 『人を生かす倫理 フッサール発生的倫理学の構築』, 2008, 481.